

体系スケッチ⁽¹⁾

ジュール・ルキエ
訳：村 瀬 鋼

ノート

反省すればするほど、真理を認識することの困難さがわかる。そもそも真理は存在するのか。そして私には真理を掴むことが許されているのか。新旧の哲学者たちはいつでも対立している。両者は長年論争しあっており、真とされるまとまった見解にはまだ辿り着かない。両者のそれぞれがいつも矛盾に囚われてさえいる。様々な宗教も、私にはやはり頼りなくみえる。民族ごと、個人ごとに、宗教は異なる。一定数の事柄について二人の人間が完全に同意する例はあるまい。異教崇拝の数々は時の裁きを受けた。その代わりになった別の宗教の数々も、安定したままではなく、盛りを過ぎれば間違いなく消えてしまうだろう。他の宗教より活力があるようにみえるキリスト教でさえ、民族や個人によって様々に解釈されている。もしキリスト教が真の宗教であったなら、あらゆる人心を集めているだろうし、今日では世界全体がキリストの十字架の前に頭を垂れているはずだ。人間たちの間で真理を探しても、全く見つからない。誤謬だらけ、矛盾だらけだ。私は、自分の行為において自分自身を眺めて、せめて自分だけでも真なるものの中にいることはできないのかを見てもみることにしよう。ああ、子供のときから、何となくさんの誤謬、何となくさんの変動、何となくさんの変化だろう。幼児期や青年期の数年間には真実だと信じていた見解を、今の私は虚偽だと見ているが、さらに、最近の見解ですら時が経てば別のものになってしまうかもしれない。この新しい見解だって、いっそう確実であるわけでもないのだ。私の目は私を欺く。私の耳は、すぐに存在していないとわかる騒めきを私に聴かせる。いつも逃げてしまう一つの真理を征服しに向かうための堅固な支点は、いったいどこに見つかるのか。経験は、こうした目標に到達せんとする

試みの虚しさを教えてくれているのではないか。それともむしろ、こうした経験自体の確実性について私は何かを主張できるのだろうか。私は、自分の存在の根底で、自分の知の根拠をこれ以上探すことを許さない一つの循環に出会うように思われる。

私のうちにも他の人間たちのなかにも存在していると思われる諸観念の全ては異議を申し立てられた。私は〈神〉や〈自由〉といった観念を持っているように思われるが、それらの観念の客観的価値は、人類の大部分によって否定されているとわかる。そこで、真理も誤謬も我々においていっさいは必然的であるのだ、或いはむしろ、本来は真理も誤謬もなく善も悪もないのだ、と信じたくなる誘惑に駆られることになる。

だが、私は気づく。もし我々においていっさいが必然性に従っているなら、いっさいは必然性に従っていると主張することすらできない。なぜならその場合、この命題は必然的なものだということになり、従って私はこの命題を他の全ての命題から区別する術を持たないことになるのだから。もし一切が必然的なら、知それ自身が無力さに襲われるのであり、私には真理を誤謬から区別しようと求める理由がないことになる。なぜなら、私は真理と誤謬とが存在しているかどうかさえ知らないからであり、私は絶対に何も知ることはできないからである。真理を誤謬から区別できるためには、私が自由である必要があるように思われる。だがこの自由こそ、異議を申し立てられているものなのだ。或る人々は自由を否定し、他の人々は定義の仕方において異なり、誰も自由を理解していない。だが、もし思い切って真理と誤謬とがどうなっているのかを確かめてみようというのなら、自由を出発点にとるより仕方がない。というのも、私には、自由は認識の可能性の条件そのものであるように思われるからである。私は何の危険も冒してはいない。自由を仮説

として採用して、引き返す能力、想定の評価しか持たぬ自由を基礎に採ること
で築こうとした建物を倒壊させる能力をつねに保持したままで、自由が
我々をどこに導いていくか見てみよう。だから、自由を信じることを試みて
みよう。私は自由な存在である。つまり、私は二者択一の二項間で選択する
ことができ、その一方を排除して他方を実現することができる。自由な存在
である以上、私は責任のある存在 [un être responsable] である。というも、
私がどれかを選ばねばならない諸々の動機は、無差別なものではないから
だ。これらの動機のなかに私が見つけるのは、善の観念、真の観念、美の観
念、等々である。長所と短所の観念が、私の採る決定に続いて生じる。だか
ら私には責任があるのだ。私は誰に対して責任があるのか。私自身対して
か、それとも他の存在に対してか。我々の存在の全局面を考えてみよう。私
は自分の実存の根拠 [la raison de mon existence] を持っているのか。私は私
自身の深みに暗闇しか見出さない。自分がどこから来てどこに行くのか、私
は知らない。もし私が自分自身の作者だったら、自分自身の存在について説
明できるはずなのに。私は、あらゆる面で制限された不完全な存在として私
に現われる。私のうちで私の自己性を構成している私の自由を考えてみる
と、私は、私の存在の根にある一つの力能 [une puissance]、できる何か
[quelque chose qui peut] に出会う。この力能はどう存在しているのか。この
力能の本性はどんなものか。神秘である。これに劣らず驚異的なあの原理の
ことを考えてみる。その原理は、私に対象を表象し、私にイメージを伝送し、
私を、宇宙と私自身とが描き出される鏡にする。私が力能と呼んだ原理と同
様、私が知性と呼ぶこの原理も、私は説明できない。知性の観想する対象の
方へと私を引き摺っていく、私が愛と名付けるあのもう一つの原理にも、同
じ神秘がある。私は私自身を説明できない。同時に私は、誤謬と真理との間、

善と悪との間で自分がつねに分割されているのを認識する。だから私は絶対的な存在ではない。私は不完全な存在だから。私は自分自身に対して説明不可能な謎 [une énigme inexplicable] であるから。それでいて、私は自由な存在たるかぎりて責任を持つ。私は、私のうちにある諸能力 [les pouvoirs] を説明できない。それでいて私は、自分がそれらを用いると知っており、自分の能動性のこうした行使において自分の諸決定に責任があると知っている。いっさいが私に言う。自分の存在根拠を自己のうちに持つもう一つの別の人格があり、この人格に対して私は責任があるのだと。ならば、この絶対的な、従って独立的かつ無責任な、この人格の方へと昇っていきこう。私はどうやってこの人格を自分に表象するのか。私は私自身しか認識しない。だから私には、この無限な人格に、私の魂のなかに見つかる諸々の完全性を、無限な力能にまで高めようと腐心しつつ運び込む必要がある。私は私のうちで、能動する或る原理、できる或る原理 [un certain principe qui agit, qui peut] に出会った。だが、私のうちにあるこの力能は、それ自身のうちに自分の存在根拠を全く持っていない。これに対して、私が無限な人格へと運び込むことになる力能は、それ自身のうちにこの存在根拠を持っているはずだろう。とすると、無限な人格の力能は、何によって在るのか。自己によって、つまり力 [la force] によって。

無限な力は絶えずそれ自身を実現する。そして、私はそれを、能動するものと見なす以上、それは外に自分を投射するし、それはそれ自身に従って、つまりは無限な仕方て能動するので、それは自分を再生産する。この再生産は、それ自身の表象である。だが、能動する力ないし力能 [la force agissante ou la puissance] と、私が知性と呼ぶこの表象作用との結合を基礎づけるには、第三の原理が必要である。この第三原理は愛でなければならない。だか

ら、この無責任な人格には、私のうちでと同様に、三つの原理があるのだ。この三つの原理を主体とみなすか客体とみなすかによって、私は、或る唯一の人格のうちに溶けた三つの人格を見出す。この唯一の人格は、自己によって存在し、絶対的 (absolutus、つまり独立的) で、まさにそれによって無責任である。その現前において私が私を維持するこの無責任な人格、私はこれを神と呼ぶ。

(それは永遠性であるのでも無限性であるのでもないが、永遠的かつ無限的である。それは持続であるのでも空間であるのでもないが、持続しかつ定在する。それはつねに持続し、いたるところに定在する。そしてそれは、つねにいたるところに存在することで、持続と空間とを構築する。[Non est aeternitas nec infinitas; sed aeternus est et infinitus; non duratio nec spatium; sed durat et adest; durat semper, et adest ubique; et existendo semper et ubique, durationem et spatium constituit.])⁽²⁾

無限な力が、無限に自己実現することで、或いはむしろ、この人格全体が、つねにいたるところに存在することで (existendo semper et ubique)、空間と時間とを構成する (spatium et durationem constituit)。だから、私は無限な人格の懷に包まれている。この人格は、かりに私を作さなかったとしても、私なしで存在しえたにちがいない。この人格は、かりに私を無のなかに投げ込むことはあっても、自分の存在を完成させるのに私の存在を必要とはしていないのである。だが、私は、この無責任な人格の無限の善性 [la bonté infini] を覚知する。そして私はそこに、私の存在根拠と未来への保証とを見出すのだ。そう、或る不屈の本能 [un instinct invincible] が、私は存在すべきだったと信じるよう私に強いる。もし神が私に生を与えるのを控えていたとしたら、神はその善性を十分に発揮しなかったことになっていたはずだ、と。他

方では、これに劣らず不屈な本能が、この無責任な人格は私を創造しないこともできたのだ、この人格は私に存在を与えた行為において絶対的に自由であったのだ、と私に言わせる。いま、これらの本能を説明する術を探ってみよう。神が創造するために自分自身から脱出するとき、神の手から零れ落ちる作品は、即座に必然的に、〈質〉[quale]と〈量〉[quantum]というこの二つの性質とともに私に現われる。それは神の作品である。この資格で、それは神の秩序が携えている最高度の完全性を実現しなければならない。それは有限な作品である。それは〈量〉の視点、つまり空間と時間という観点では、恣意的なものを含んでいる。従って、神は創造することもしないこともできたのだ、そして創造する際、神は自分の作品を空間の恣意的な部分のなかに随意に閉じ込めることができたのだ、と私は必然的に理解する。だからここで私の二つの本能は満足する。神の善性は、私に私の存在根拠をもたらすし、神の独立した人格性は、私が存在しないこともありえたと私に教えるのだ。

ここで或る新しい局面が私に現われる。ここまでは、この無責任な人格をそれ自身において考察していた。そして、それが不変でありいっさいの変化を寄せ付けないことを見出した。今度は、この人格を、世界との諸関係において考えなければならない。神は、存在の全体性 [la totalité de l'être] をもってではなく、諸完全性の全体性 [la totalité de perfections] をもって私に現われた。だから二つの区別された人格（神と人）が現前している。一方の人格は他方の人格の二重様態のなかに包含されているにしても。それは、この二重様態、つまり空間と永遠は、力能や知性や愛といった神の他の諸属性において示される完全性の性質をまったく持たないということだ。

何か新しいものが産出された。一つの人格が、存在し始めた。それは空間

と持続とのなかで生きる。無責任な人格は責任ある人格を観想する。彼の無限な知性の眼差しを逃れるものは何もない。物理的な諸現象は恒常的法則に従って継起する。この不変な法則を設立した神は、かくかくの状況の支配下でしかじかの現象がこれこれの瞬間に顕現するだろうということを知っている。だが同時に、神は、自分の手仕事である世界におけるこれらの諸現象に居合わせるので、神は、これらの諸現象が継起するのを見、時間のなかで継起的に行なわれる一定の諸変化を継起的に知覚する。恒常的法則に従って決定されてはいるが未だ実現されてはいない一つの現象が実現されにくる度、この現象は（神が創造したとすれば）存在すべきだと永遠の昔から知っていた神は、それが今実現されたのを見る。そして、もし、神が、それぞれの存在の度合いを、それが現実にあるとおりに知覚するのでなかったとすれば、神の知には何か欠けていることになってしまうだろう。

人間にとっても、物事はまさに同じように起こるが、但しそこには、人間の自由が必然的に持ち込むはずの差異が伴っている。神は、一切の在るものを知っている。だから、人間において起こる一切を知っている。人間の諸決定が潜勢態にあるときは、神はそれを潜勢態において見るし、それらが現勢態にあるときは、現勢態において見る。永遠の昔から、神は客観的に到来しうる物事を知っていた。神は、人間に対して、客観的な可能的なもの、ないしは即自的な可能的なものについての知を持っている。人間は、主観的な可能的なものしか認識せず、客観的な可能的なものは、ただ実現されたときのみ認識する。だから、無責任な人格は、熟考し行為する人間、神が永遠の昔からの知識を持っている客観的な可能的なものうちの幾つかを毎日実現する人間を観想する。神は、未来という言葉で正当に理解されうるあらゆる意味における未来を、完全に知っている。だが神は、決定されていないもの

を決定済みのものとみること（それは矛盾になるだろう）はない。人間の諸行為は必然的なものではない。なぜなら神は人間に自由を、つまり、或る所与の瞬間に自分自身だけの意見を容れて或る仕方か別の仕方で行為するという理解不可能な能力を与えたからである。

トマス主義者とともに、永遠は神にとっては一点であると、そして人間の諸決定を潜勢態としてと同時に現勢態としても見ると言うならば、時間を破壊してしまうことになり、時間はもはや、主観的な現象、錯覚でしかなくなるなだろうし、人間の自由は妄想、幻になるだろう。

スコトゥス主義者は、神にとっての継起的永遠、つまり同じものから同じものへの継起、という見解を主張している。トマスは、神は人間の行為について推測的認識しか持たず、一点として理解された〈すべて同時に〉[*tota simul*]の永遠性を手段にだけ想像的な予知を再建する、ということを認めるが、スコトゥス主義者の上記の理論を採った上で、これをトマスのこの見解と結合することができるだろう。

神の指から落ちた世界は、その秩序において完全である。だが人間は自由なものとして創造された。そして神は、人間にこの自由を与えることで、悪の可能性の作者になった。この悪の可能性は、神の創造物の最大の完全性である。だから、自由なものとして創造された人間は、自分の自由を善く用いることで、確立された調和のなかに、第一の秩序のなかに留まることができた。だが、現在の世界を眺めると、人間の魂のなかには悪の種があり、外的自然のなかには驚くべき墮落がある。この二つの秩序を比較して、私は、人間の自由の濫用から帰結する一つの破局 [*catastrophe*] が存在したのだと認める。私は、人間たちを互いに連帯的にする不可思議な法則の存在を確認する。このために悪の伝搬が生じたのだ。最初の人間の子供たちは、父から墮

落した身体を受け取る。そして肉の墮落は精神の墮落を伴っている。この最初の原因に、親たちから子供たちへの影響、社会と人類の影響を加え、自由の悪用を加えれば、現在の秩序のなかに認められる墮落の理由がわかるだろう。

しかしながら神はつねに人間を観想し、人間は、世界に悪を導き入れることで、神に悪の醜さを観想することを強いることによって、神の聖性を汚す。神は永遠の昔から悪を可能性の状態を観想していたが、今度は現実的な悪の状態、現実化された悪の状態において悪を観想するわけである。だが、神が世界を創造した行為は、優勝的に自由であった。神を創造へと促した神の愛の諸要求は、〈量〉における恣意性によって無に帰されていたばかりではなく、世界に悪が導入される可能性、そして人間にとって最初の秩序に対する違反の帰結でありうる諸々の懲罰が導入されるという可能性によって相殺されてもいた。それでも神は創造した。ところで、最初の人間の息子たちは、自身では無実であるのに、父の過失の帰結を被る。悪の可能性の作者である神は、或る程度において人間と連帯している。神はその知性において汚される。というのも、神は知性によってこそ世界との関係に入るからである。実際、世界が現実化された瞬間から、神は力能によって世界との関係に入ることはないし、神の愛は真善美を愛するのみで、醜に向かうことはまったく強いられていない。神の知性だけが、悪を観想すべく定められている。それは実際、人間の知性は有限でありながらも無限を表象しており [représentative de l'infini]、神の知性は無限でありながらも有限を表象しているからである。創造者と被造物は、まさに知性によってこそ関係するのだ。神は、自由に世界を創造することで、その帰結の一切を受け入れていた。だから、我々が見つけたこの連帯性の法則は、人間をも神をも包含する。人間の失墜において、

第二の秩序が始まる。この転覆を信じるときの私の行為は、責任や神や創造を信じたときの私の諸行為とは異なっている。この確信は、偶然的事実に基づいている。私は、原的失墜 [la chute originelle] の確実性を、私とその観念を持つ最初の秩序と私が観想する第二の秩序との間の比較から引き出すのである。

だが私は、自由は仮説として立てられていたことを思い起こす。恐らく、もし自由を認めるならば、自由を出発的にとることで気づいた一組の諸原理も認めることになる。だから問題は、私は人間の自由を信じるかどうかということに帰着する。もし自由を信じることを拒むなら、一切は必然的であることになるのだから、私はどんな小さな主張も控えねばならないことになる。私は、自分は疑っているとも主張する権利も持たないし、一切は必然的であると主張する権利さえ持たない。私は、どんな主張に留まることもなく、半睡状態のなかを漂っているほかあるまい。第一の信念について絶対的な根拠はまったく見出されないというのは本当である。だが、私のなかに、信じるよう促した或る種の必然性の現存を認め、自由を認識の条件そのものとして立てることで、私は、自由の実存へと戻っていく諸真理の連鎖を巡回したことになるわけで、この連鎖は最初の主張のなかに含まれていたものなのだ。「私は実存する [j'existe]」というこの単純な主張を提示するとき、私は私の存在の深みにおいて、そして自由の傍らで、必然性に出会う。自由は、私のうちにこの必然性の現存を認めることを可能にするのであり、真理を誤謬から区別することを可能にするのである。私は加えて愛の役割も見出す。愛は、必然性と自由との間に平和を置く。知性はあらゆる主張の第一の条件である。なぜなら或る実在を肯定するためには、前以てこの実在の観念を持っている必要があるからだ。あらゆる主張ないしは信念に必然的に貢献す

る諸原理はかくのごときである。すなわち、1) 知性、2) 必然性、3) 自由、4) 愛。神のうちには、知性、力能、愛しかない。ア・ポステリオリな依存的存在である人間のうちには、より多くの必然性がある。この要素が人間に信念を強いるのであり、しかもその際人間はこの信念の根拠を持ち得ない。だが、知や認識や信念、これらの言葉は意味に関しては同一なのだが、これらのものがあるためには、人間にとって自由があるのでなければならない。そうでなければ人間は真理を誤謬から区別する術を持つまい。だから、もし私が自分の自由を信じることを拒むなら、私はどんな確かな主張も提示し得ないという無能さを自分に宣告することになる。もし私が自由を認めるなら、もし私がこの自由を含む一つの信念に身を委ねるなら、私は我々が経巡ったこれら一連の諸観念全部を認めることを強いられる。

要旨

知の諸困難。真理を誤謬から区別すること、またそもそも真理と過誤といったものが在るのかどうかを認識することすら、ほとんど完璧に不可能である。そこで、いっさいが必然的であると信じたくなる傾向が出てくる。だが、いっさいが必然的であるとすれば、知をなさんと求めることさえできないと宣告されていることになる。実際、知をなさんと求めることは、自分は誤った、そこで真なるものに到達したいと願っている、と想定することであり、しかして、自分は誤ったと想定することは、自分は自由であると想定することなのである。そこで、いっさいは必然的であるにもかかわらず人間は知をなさんと求めると主張するとしたら、人間は絶対的必然性に従属していると同時に自由であると主張していることになるわけだが、これは矛盾を含

む。だから、少なくとも仮説として自由を認める、ということ望まないのなら、いっさいの試みを差し控えねばならないし、知が可能かどうかと探ることさえ断念しなければならない。そこで私は、仮説という資格で自由を認める。

自由であるとは、二者択一の二項間で選択しうること、意のままにどちらかを実現できることである。ところで、私の自由がどちらかを選ぶこれらの諸動機は、無差別的なものではなく、私のなす行為は本質的に私に関わり、私の自存性 [mon aséité] に関わるので、私は責任を持つ。誰に対してか。私自身に対してではない。というのは、私は私自身に、自己のうちにその存在根拠を持たない存在、まったく非独立的な存在、まったく非自足的な存在として現われるからだ。私は自分の存在の多様な局面を継起的に経巡り、そのいたるところでいくつかの神秘的なものを見出す。それら神秘的なものは、私の自由な力能と、私の知性と、私の愛とのうちにある。これらの諸原理の一つ一つが私を超過しており、私にはこれらの諸原理のどの一つも説明できない。これらの能力はすべて私の自存性の手のうちにある。自由であるかぎり、私はこれらの能力を自分の意志する通りに用いる。私の人格を構成している全諸要素を調べてみると、私は、自分の存在の不十分さ、自分の存在をそれ自身とは別のものに結びつけ直す必要性を認識させられる。そして、私は自分は責任ある存在だと認めたのだが、私の責任は別の人格に対してしかありえない。かくて私は、自分の人格を構成しているいっさいを道連れに、無責任でなければならないもう一つの別の人格の方へと進む。無責任でなければならないというのは、この人格は、それ自身のうちに自分の存在根拠を持たねばならないからであり、絶対的 (absolutus、独立的) なものであらねばならないからである。私はこの無責任な人格に、私自身のうちに見

出される諸完全性しか帰属させえないが、しかし、責任ある人格たる私においては有限であるこれらの諸完全性は、無責任な人格、私が神と呼ぶ存在においては無限であらねばならぬ。私は私のうちに、私の存在の根に、或る力能の要素を見出す。無責任な人格における力能は、その存在根拠を無限の力のうちに見出す。この無限の力は、不断にそれ自身を実現する。そしてもし、それが能動していると私が考えるとすれば、それはそれ自身に従って能動し、自らを再生産するのである。愛、新しい原理でありその観念が私のうちにやはりあるこの愛は、能動するする力つまり力能と、この力能の表象つまり無責任な人格の知性との間の結合を基礎づける。この絶対的人格はいたるところに実存し、いたるところに存在することで、空間を構成する。この絶対的人格はつねに実存し、つねに実存することで持続を構成する。空間と時間とは、私がまず独立的存在のふところに認めた諸原理の、つまり力能、知性、愛の、判明な諸様態である。

この無責任で自足する人格を前にして、私はまず恐怖に捕らえられる。この人格は、完璧な存在であるために、私に実存を与える必要を持たなかっただろうし、その在るところのもので在ることをやめることなく私を無に帰せしめることもできるのだ。だが、この無限の人格の愛の観念が私の精神のうちに生まれ、私は、神的善性の庇護のもとに避難して、そこに私の存在の根拠と継続とを見出す。まさに、満足させねばならないのは二つの本能である。抵抗しがたい内面的な一つの声が私に言う。この無限な人格の持つ善性が、私に存在を与える必然性をこの人格に課したのだ、と。そして同時に、これに劣らず自発的な別の声が、魂の根底から上ってきて、私にこう教える。無責任な人格は、私を創造するもしないも自由であったはずだ、なぜなら私は私のうちに自由の観念を見出すし、自由は一つの優勝的な完全性として私に

現われるからだ、と。つまり、神はア・ポステリオリに私に依存していることになるし、私は神の実存の帰結であることになる⁽³⁾。

私は創造者としての神を考える。そして私は、必然的にこの神は秩序において完璧であるような作品を実現しなければならないということを理解すると同時に、必然的にこの作品は有限であらねばならぬこと、したがってこの作品は〈量〉の観点では恣意的なものを含むということを認める。

だが、私はここまで、無責任な人格をそれ自身において考えてきた。いまや私に必要なのは、これを人間との関係に置かれたものとして考えることである。〈質〉の観点、つまり完全性の観点では、人間は神との関係のうちにあり、第一の秩序のなかに、創造者と被造物との間に存続するこの最初の調和のなかに留まっている。〈量〉の観点では、無責任な人格は責任ある人格を観想し、前者たる自分のみが知る客観的な諸可能事の領野内で、後者が熟慮し能動するのを見る。かくてここに、無責任な人格の予知 [prescience] についての問いが、責任ある人格の自由を尊重しつつ場所を得ることになる。

この第一の秩序についての観想から、私自身および私をとりまく現実についての吟味にまで降りてくると、私は或る深い墮落の刻印にいたるところで出会う。私はその原因を探し、その原因を、人間が自分の自由についてなしたに違いない濫用のなかに見出す。この原的過失 [la faute originelle] の諸帰結はどんなものでありえたのか、私は探る。そして私が認めるに至るのは、身体の墮落であり、最初の子供たちへのこの身体的墮落の継承であり、その結果としての精神的墮落の継承である。私はまた、教育の影響にも逢着し、最後には、人間における自由な力能の低下と、これによる悪への抵抗力の弱さに行き当たる。この連帯の法則は、たんに人類を包み込んでいる

ように思われるだけではない。確認されるのは、たんに、人間が道徳的秩序において自分自身の諸行為を受け継ぐように息子は父を受け継ぐ、というだけのことではなく、さらに私が考えるのは、神に対する連帯の法則なのである。そして、一方では、神は自由な人間を自由に作したのであって、それゆえ神は悪の可能性の作者である、と見え、他方では、神は人間とつねに直接交流しているのだから、この交流の帰結として、神の知性の聖潔は人間が世界に持ち込んだ悪のおかげで汚されてしまっている、と考えるなら、次のように言うことができる。それ自身では無実な被造物たちにのしかかる責任の一部分を、神は一定の範囲で受け取らねばならない、と。

(私は次のような美しい定式に辿り着いた。すなわち、人間の知性は有限でありながらも無限を表象しており、神の知性は無限でありながらも有限を表象している。)

人間が悪をなすなら、人間は、有限でありながら、無限な存在を傷つける。懲罰は二つの項の本性から生じるのでなければならない。罰の永遠性という問題はここに位置する。連帯の法則についての考察はまた、福者たちによる罪人たちの贖罪という観念をも私に与えてくれる。

しかし、私はそこで立ち止まる。なぜなら或る新しい秩序が始まるからであり、またこの新しい秩序とともに、新しい種類の諸真理が始まるからである。私は出発点に、つまり自由に立ち戻った。私はかつて、自由を仮説という資格でのみ採用した。問題は、私はこれから、自由を信じようとするのか、という点に帰着する。そして、この信仰の行為は、私がいま経巡った諸観念の系列全体を包含することになるだろう。

私は自分の自由を信じなければならない。さもないとどんな僅かな肯定すらもたらしえないことになる。自由は実際、信念の条件そのものであり、し

たがって、それ自体が信念にはかならない認識の条件そのものである。自由なしには懐疑を肯定することすら不可能であるということを示すために、肯定の分析がここに位置づけられる。もし自由を信じるなら、我々が提示した諸真理の秩序全体を信じるよう強いられる。なぜならこの諸真理の秩序は自由の実存から必然的に生じてくるものだからである。だから残されているのは、ただ一つの信仰の行為を全体に及ぼすことである。

ここで注目すべきなのは、キリスト教のみが、人間の人格と神的人格とを、両者を結合する関係とともに理解した、ということである。自由の教義、三位一体の教義、創造の教義、失墜の教義を固持するのは、キリスト教だけなのである。哲学が確認する神と人間との間のこの精神的な関係を、キリスト教は、純粋に精神的なものとして述べるという以上に、〈受肉〉の教義によって聖別する。神と人間との間の関係の諸項そのものの一つである神的知性、人間の悪によって汚されたこの神的知性こそが、神と人間との間の関係に生命を与え、生ける絆、いわば血を流している絆によって、創造者と被造物という二つの人格を結び直す。ここには、無責任な人格が責任の一部を意志的に受け入れるのが見られる。神はその知性においては人間に軽く触れることしかしなかった。愛の過剰によって、神は自分自身を自分の被造物に繋ぎとめようと意志し、自分を被造物へと結合するこの絆が不壊のものであることを願う。

このように考えられた哲学、つまり真の哲学は、啓示宗教に生ける光を投げかけ、啓示宗教の方でもこの哲学を照らし返す。これこそがまさに聖パウロの〈理に適った奉仕〉[obsequium rationabile]⁽⁴⁾、である。ただし、哲学と啓示とは深く絶対的に区別されているということをお忘れないようにしましょう。哲学は、永遠的だと精神が把握する諸真理に関わる。宗教は、或る偶然的事

実、生じないこともありえたはずの原的失墜に基づく。だが、哲学には宗教と同じくその信仰の行い [acte de foi] がある。区別されていながらも類比的なこれら二つの信仰の行いが、人間にとって真理全体を構成する諸真理の二つの秩序を包括するに足るというのは、実に注目すべきことである。

神は奴隸的な崇拜者を望みはしなかったということ、神は我々の父かつ我々の贖罪者となることで、彼の子供たちに、信じるに足る諸動機を自分たちの認識のなかに見つける務めを委ねたということ、このことを考えると、或る密かな情動をもはや禁じえないのである。【手稿 255, pp.1-18.】⁽⁵⁾

諸教義を説明しようと努めるときから、ひとは理性の光を用いるのであり、したがっていくらかの哲学を行うのであるが、それは、失墜以前のアダムが認識していた諸真理を含んだあの最初の形而上学ではない。残りはこの最初の秩序とこれら最初の諸真理との自然な帰結として我々に現れるのでなければならぬ。アダムは贖罪の可能性や罰などといったものを認識していなかった。もしそんなことがあったとすれば、それは彼の自由を傷つけていたにちがいない。ところで、我々の魂のうちにとどまっていて、我々が理性の諸力のみで到達できる根本的諸真理とは、まさにアダムが持っていた諸真理なのである。キリスト教の諸真理はもう一つの別の秩序に属しており、それらは、世界への悪の導入後に人間たちに啓示されることが必要であった。ただ、啓示された諸真理は、理性によって提供される諸真理と関係を持たねばならず、前者はこの形而上学の光を受け取る必要がある。代わりに形而上学はまさにこれによって確証されることになるだろう。【手稿 255, pp.100-101.】

真の哲学でさえ、第二の秩序のなかにいる人間の欲求を満たすことはできない。真の哲学とは、アダムが認識していたはずの諸真理の総体である。アダムの過ちの後、諸事物の新秩序に関わる諸真理の新秩序が訪れる。一方には哲学の領域が現れ、他方にはキリスト教の領域が現れる。キリスト教が正規の領地から何も失うことなしに、第二の秩序において理性の諸真理を認識することは有益である。それは、啓示された諸真理の上に投射されてそれらを照らす、一つの光である。尤も、民衆はいつもキリスト教にいつそう心を動かされるだろうし、そうであるべきである。しかし、真の形而上学の出現に続いての、キリスト教における生の刷新、生の一新を考えることは可能である。【手稿 255, pp.140-141.】

人間には、自分の知性のなかに意のままに夜を作^なす能力が与えられている。アダムは物事についての明晰で精確な視覚を持っていたが、にもかかわらずこの自然の光を暗くして闇で覆ってしまうことができた。この理解不可能な能力は、人間の自存性にその根拠を持つ。人間の自存性は、或る永久的な奇跡だ。もしアダムが自分の知性のうちに夜を作すこの能力を持っていなかったとしたら、彼は罪を冒さなかったはずである。なぜなら人間はつねに、あらゆることを考慮して最善だと自分が信じることに向けて決断するものだからである。ただ、まさにこれが人間の自由の神秘的なのだが、人間には、あたかもそれ自体としていつそう理に適わないことがいつそう理に適うことであるかのように、いつそう理に適わないことをいつそう理に適うことよりも優位に置く、ということが可能になっている。実際、人間の人格性の基礎を構成している人間の自由、人間の自存性は、知性や愛を道具として用いるのであり、だからその意味で、人間はその自存性のおかげでこそまるごと自分

に帰属すると言うのはたしかに真実なのである。かくて理解されるように、人間は自分の知性に意のままに働きかけることができ、それを真なるものの圏域に包み込むことも、それをこの圏域から抜け出させることもできて、それ自体では無差別ではない諸々の物事を無差別なものとして扱うことができるのである。いったい、もしアダムが、物事についてのあの明晰で精確な視覚、神が与えてくれたこの視覚を恒常的に持っていたとしたら、そして、この視覚を変わりなく維持することが許されていたとしたら、それ自体としていっそう理に適ったことをつねに見取って、彼は悪を犯さなかったにちがいない。しかしアダムは自由であった。そして、この自存性は、物事に現実性を与えたり拒否したりすること、つまり彼との関係で創造することを彼に可能にしてくれていたのだが、この理解不可能な自存性のおかげで、彼は、自分の知性をこの判明で明瞭な視覚から引き抜き、これを、在りもしないものに適用し、かくて、在りもしない物事に現実性を授け、つまりは自分がそう意志するからこそ自分を騙して誤りを犯すことができたのである。まさにこの意味で、悪にはつねに誤謬が先立つというのは本当である。そして魂は、悪しき決断を選びとる前に、自分の知性のなかに誤謬を導き入れて、それ自体ではいっそう理に適わないものを、まさに自分がそう意志すればこそ、主観的にはいっそう理に適ったものに仕立て上げ、道徳的悪を犯すことでこの誤謬を聖別するのである。

第二の秩序のなかで生き、失墜後の秩序の一部をなしている我々にとっては、非意志的な誤謬と意志的な誤謬とを区別する必要がある。非意志的な [involontaire] 誤謬とは、悪意ある教育が我々に与える誤謬である。尤も、信じるか信じないかはつねに我々次第であるという意味においては、この誤謬そのものが意志的である。けれども、勝れて意志的な [volontaire] 誤謬

とは、我々が自分自身を独占し、自分の熟慮の聖堂から自由な行為を脱出させ、自分自身の意見しか聴かずに、在りもしない事物に努力して現実性を授ける、そんな場合の誤謬である。第一の誤謬もなるほど悪を引き連れてくる。この誤謬から帰結する結果は無差別なものではまったくないのだから。だが、その過失は連帯の法則に属し、責任は我々の同胞たちに配分される。上述の第二種の誤謬は、或る人物の自存性のいっそう活動的でいっそう孤独な一行為の帰結であるという点でのみ、第一の誤謬とは異なっているのだが、この第二種の誤謬から生じる悪についての責任は、第一のものの場合とは反対に、決定を行った人物に全部まるごと帰属する。なぜなら、この決定は、連帯の法則の諸影響からア・プリオリに独立しているからである。最初の人間の諸決定とはこうした性質のものなのであり、最初の間は、その自存性のおかげで自分の知性のなかに夜を作ることができたからこそ、そしてそれを実際に作したからこそ、また自分の誤謬を聖別してそれを主観的に真理となすことを意志したからこそ、悪を犯したのである。【手稿 255, pp.24-26.】⁽⁶⁾

訳註

- (1) 著者である哲学者ジュール・ルキエ（Jules Lequier または Lequyer, 1814-62）に関する基本的なことがらについては、拙稿「ジュール・ルキエの「クマシデの葉」——翻訳と註釈」（『ヨーロッパ文化研究』第26集、2007年、所収）の解題を参照。ルキエは生前、著作を公刊することがなく、自らの作品を満足に完成させるには至らなかった。親友のシャルル・ルヌヴィエが、遺された草稿から比較的完成度の高いものを編集し、ルキエ自身の構想と思われるものに合わせて再構成して公刊したのが『第一真理の探求』（*La recherche d'une première vérité*, 1865）である。ここに我々が訳出するのは、『第一真理の探求』に収められた文章群が書かれるのに先立つ時期に、ルキエが自らの哲学体系の概要を展望的に記したノートである。ルキエ解釈に際して、ルキエの未完の哲学にまとまった見通しを与えてくれるきわめて重要なテキストと言ってよい。ルキエ全集の編者ジャン・グルニエ

(Jean Grenier) と、近年のルキエ研究の第一人者であるアンドレ・クレール (André Clair) に従えば、執筆時期は 1845 年から 1846 年頃と推定される。筆跡はルキエのものではなく、秘書が筆耕による口述筆記ないしは書写と見られる。テキストは、グルニエ編の全集所収のもの (Jules Lequier, *Œuvres complètes*, La Baconnière, 1952, pp.313-327.) による (初出は同じくグルニエ編のルキエ遺稿集, Jules Lequier, *La Liberté*, textes inédits présentés par Jean Grenier, Vrin, 1936, pp.37-52.)。「体系スケッチ」という表題は、クレールが自らのルキエ研究 (*Métaphysique et existence. Essai sur la philosophie de Jules Lequier*, Vrin, 2000.) にこのノートの主要部分 (手稿 255 の pp.1-18 の部分) を付録として収録した際のクレールによる表題 « Esquisse du système » から借りた。手稿そのものには、たんに「ノート [Notes]」および「要約 [Résumé]」なる見出しが見えるのみである。なおグルニエはこれらのノートに「体系。概観 [Le système. Vue d'ensemble]」という見出しを与えている。

- (2) トマス・アキナス『神学大全』I^o, q.68, a.1。(グルニエの註記による。)
- (3) この最後の一文は鉛筆で書き加えられていた (グルニエの註記)。
- (4) 『ローマ人への手紙』12-1。
- (5) 手稿についての指示はグルニエによるもの (以下同様)。
- (6) これらの頁は、「イエス=キリスト」という表題がつけられた展開の一部である。我々はこの展開の冒頭しか提示していない。というのもルキエは前置きのノートで、展開の以下の部分 (〈受肉〉について) は正しくないと認めているからである。ここに提示した頁は、第一と第二の「秩序」の間の差異に専ら関わっている。(以上はグルニエの註記。)